

双方向画像通信を用いた遠隔教育の試み

放送教育開発センター・ニューメディア研究班

奈良県東生駒にあるニューメディア開発協会の東生駒実験場H i - O V I Sにおける『H i - O V I S市民大学講座』の試みについては、すでにその昭和59年度における成果を発表した。（岩永雅也・島田裕己「H i - O V I Sにおける遠隔教育の実践」1985年5月24日電子通信学会，特集「H i - O V I S市民大学講座」，『MME研究ノート』第23号，1985年10月）

この市民大学講座はH i - O V I Sと放送教育開発センターが共同で実施している研究開発事業であり，その第2年度目として昭和60年度に再び実験放送を行った。

〔1〕 H i - O V I Sの概略

H i - O V I Sは近鉄奈良線の東生駒駅の駅構内に設けられ，光ファイバーによって156世帯のモニターの家庭と結ばれていた。H i - O V I Sの機器センターには，スタジオと送信システムが設けられ，各家庭には放送を受信するためのシステムとして，ターミナル・アダプター，キーボード，テレビ・カメラ，マイクロフォンのセットが設置されていた。放送としては，スタジオを使用しての自主番組や，ビデオ番組のサービス，静止画による各種の情報サービスを行っていた。さらに最後の段階では，ホーム・セキュリティ・サービスや，スーパーマーケットと提携してのホーム・ショッピングのサービス等が試みられ，新しいメディアをいかにして地域住民の利用に供することが出来るかが目指されたのである。

このH i - O V I Sの他に見られない特徴は完全双方向放送を実現していたことで，スタジオからの呼びかけに応じて家庭にいるモニターは，テレビとマイクロフォンを使って直接応えることが可能になっている点である。つまり，一般のテレビと大きく異なって，スタジオから視聴者の生の顔を声をとらえる

ことができたのである。さらに、双方向のシステムによって番組に参加したモニターの映像は同時に他の家庭にも送られるため、そこではスタジオとモニターの応答の様子をつぶさに見ることができる。また、双方向による応答は複数のモニターが参加することも出来、スタジオを介してモニター同士がテレビの画面上でお互いの意見をたたかわせることもできた。

〔2〕 昭和59年度の実験成果

今回の報告を行う前に、59年度の『H i - O V I S 市民大学講座』について述べる。

59年度の『H i - O V I S 市民講座』においては、目的を「双方向CATVによる弾力的学習指導の可能性を明らかにする」ものとし、三つの実験番組を放送した。

(1) 『宗教理論と宗教史』

これは、宗教学の概論的な講座で、放送大学の実験番組ならびに本放送用の2種類の番組を教材として利用し、その比較を一つの目標とした。また、講師が解説におもむき教材を部分的に使用して講義を行った。テキストとしては実験番組の際に使用されたものを使った。

(2) 『教育と社会』

これも放送大学の実験番組として制作された番組を教材として利用し、毎回講師がスタジオで解説を行った。また、番組5回ごとに講義内容に関するテストを実施した。テキストとしては実験番組用のものを使用した。

(3) 『コンピューターと社会』

これは前二者とは異なり、番組を自主制作する方針で臨んだ。しかし、現実には様々な問題点が発生し、講師が直接スタジオで講義する形式に改めた。

講座は59年12月の第1週から開講し、各15回で、3月最終週に終了した。また、スタジオではモニター以外の受講生が参加した。終了者には、修了証を授与した。

この『H i - O V I S 市民講座』では、受講生の熱意に支えられた面が少なくなかったわけであるが、いくつかの問題が浮彫になった。

その中で最も大きな問題は、放送教育の方法に係わるものである。放送教育は、根本的に多数の視聴者を同時に相手にする教育のメディアである。したがって、その出発点から一対一対応という個人的なレベルでの応答は想定されていない。そういった体制で十分とされてきたのは、まず放送の視聴が教室で多く行われ、不明な点を教室にいる教師が明らかにすることが可能だったからであり、また印刷された教材が準備されていたからである。しかし、これは大学教育のレベルにおいては未解決の問題としてのこらざるをえない。なぜなら、大学レベルにおける教育は講師の研究に負うところが多く、他の人間にはその考えに対して発せられた疑問に回答することが容易ではないからである。したがって、受講生の側にも番組の講師自体に回答を望む声が出てくるのである。双方向の実現は、講師と受講生が直接に応答する道を開くものである。

〔3〕 60年度実験番組

60年度の実験番組は、59年度とは異なり、既存の番組を使用せず、毎回講師がスタジオで講義を行うというものである。そして、テーマを統一し、参加した各講師が、そのテーマを盛りこんだ番組づくりをすることになった。また、今回はH i - O V I Sで制作した番組を他のC A T V局に同じ市民講座として放送することにもなった。

＊『H i - O V I S市民大学講座』

(1) コース名

『新しい日本学のころみ——日本的なものを求めて——』

(2) 専任講師

阿 部 美 哉	(放送教育開発センター教授：統括責任者)
浜 野 保 樹	(同助教授)
館 昭	(同)
塩 崎 千枝子	(同助手)
島 田 裕 巳	(同)
岩 永 雅 也	(同：世話役)

(3) 放送期間

昭和60年9月～61年1月（全20回）

放送時間 金曜日午後8時から

(4) 放送内容

0. 「開講にあたって」

（コースおよび講師陣紹介：全専任講師）

1. 「開く——日本文化と合意のダイナミズム——」（阿部）

全体のガイドラインとなる今回は、講座全体の問題意識を提示するものであり、テンキーを多用することによって、モニターの参加意識を高めるとともに、その関心の動向を探った。一部にH i - O V I S側の取材したV T Rを使用し、一般の人々へのインタビューを試みた。

2. 「爆発する——縄文文化と現代文化——」（館）

ゲストに大河原忠蔵奈良教育大学教授を招き、その講義を中心とした。講義においては多数の写真を用いて行った。

お茶、お華……日本文化というときすぐこうした静的イメージが浮かぶ。しかし元来日本人の心性には、より動的で激しいものがある。岡本の縄文土器をめぐる評論を中心に、縄文文化と現代日本文化とのかかわりあいについて考えた。

3. 「撮る——カメラを通して見た日本人——」（浜野）

著名な映画監督である木下恵介氏を招き、その制作した映画作品を見ながら、映像化された日本人について語ってもらった。話を通じて日本映画の楽しさ、素晴らしさを再認識することを目指した。

4. 「暮らす(1)——家庭のなかのおとなと子供——」（塩崎）

ゲストに主婦でありエッセイストである本間千枝子氏を招き、日本の家庭でのしつけの特徴や問題点について、特にアメリカの家庭との比較を通して考えた。育児書に見られる育児法の違いを指摘し、その文化的背景を考察した。最初に双方向を通してモニターに意見を求め、テンキーも利用した。

5. 「暮らす(2)——家庭のなかの男と女——」(塩崎)

ゲストに僧籍にあって同時に社会学者である大村英昭大阪大学助教授を迎え、現代の家庭のなかで、男と女はどのように協働し、どのように闘っているのか。男と女の置かれている家庭での位置や期待されている役割を通して、男と女が「暮らす」ことの意味を探ってみた。前回と同様に、モニターに対する双方向での質問テンキーでのアンケートを試みた。

6. 「詠む——万葉の世界と現代——」(岩永)

ゲストに日本の古典文学を専門とするニコラス・ティール放送教育開発センター助教授を招き、外国の目から見た万葉集の世界を考察した。奈良にある万葉植物園でのロケ他を素材として利用した。ロケでは、講師二人が赴き、万葉集に歌われる花についてその実物を見ながら解説した。

7. 「表す——女子体育の今昔——」(館)

近代体育の導入とともに、旧来の養生にかわって、積極的な身体作りが健康思想の主流となってきた。戦前はなにかの目的のための手段と考えられた体育も、時代の流れとともにそれ自体を目的とするものになりつつある。つまり、「鍛える」、「守る」といった段階から、「表す」、「楽しむ」といった、それ自身を目的とする行為へと変身しつつあるのである。その傾向は、特に女子体育において著しい。こういった問題意識に沿って、社会体育や大学での体育の授業における女子のダンスをロケし、それを中心に講義を進めた。ゲストは上沼八郎奈良教育大学教授、木村真知子同助教授。

8. 「育む——幼児教育としつけ——」(岩永)

幼稚園、保育園での保育の様子を講師自らがロケし、それを素材に、われわれのもっている児童観やしつけに対する考え方を再検討した。また、ゲストに付近の幼稚園の園長を招いて、現在の幼稚園、保育園の問題点もあわせて議論した。

9. 「ゆれ動く——若者の心と生活——」(岩永)

世代による感覚のズレや考え方の違いはどんな時代にも普遍的に存在す

る。しかし社会変動の速度が桁違いに速い現代の日本では、そのズレも広がるいっぽうのように見える。今日ほど大人が若者の気持ちを理解できなくなった社会はかつてなかったといえるだろう。ここでは神戸市で行っている若者の電話相談の利用の実態をロケによって紹介し、現代の若者が何を考え何を悩んでいるのかを探った。ゲストに池田寛大阪大学助教授を迎えた。

10. 「学ぶ——戦後日本教育史——」（岩永）

今回は講師の講義のみによって進め、双方向テンキーばかりでなく、映像資料等一切用いなかった。戦後日本の教育制度は、国民の側に蓄積された戦前教育の残渣とGHQの実験室的教育理念との合成物として形成された。それが今日様々なかたちで歪を生じている。そういった問題を扱った。

11. 「演出する——映像に見る日本——」（浜野）

著名な映画人である織田明日本シナリオ作家協会事務局長をむかえて、映像を通して眺めた日本の諸風物について話を聞いた。もっぱら対談によって進行した。

12. 「装う——美は力か——」（浜野）

日本人の美意識、特に女性の美しさに対する感性のありようを探った。欧米での研究を踏まえ、美人であること、不美人であることの社会的意味に関して大胆な考察をくわえた。

13. 「知らせる——変革期にきた放送界——」（浜野）

今、様々な意味で放送が変わりつつあると指摘されている。日頃われわれが最も親しんでいながら、その内実をほとんど知ることのないテレビの舞台裏のエピソードを交えながら、これからのテレビをどう考えるべきかを考察した。ゲストには鈴木健次NHKチーフ・プロデューサーを招いた。

14. 「繋ぐ——テレコンピューティングは社会を変えるか——」（浜野）

テレコンピューティングの最新の情報を織り込み、スタジオでの実演を交えながら、これからの情報伝達システムのあるべき姿を考えた。特にコンピューター通信の実情の紹介に力を入れた。

15. 「集う ― 日本的共同体の人間関係 ―」（島田）

日本人の特徴として、共同体の重視が指摘される。こういった過程を通して日本人のいわゆる集団主義が生まれてくるのか、またそれは日本という場を離れても可能なのか、日系移民の宗教を調査した井上順孝国学院大学講師をゲストに招き、写真やテンキーでのアンケートを混じえながら考察した。

16. 「信じる ― 地域と信仰 ―」（島田）

自然に対する共感的な態度が日本人の自然観である。そういった問題を多数のVTRを混じえて、考察した。VTRとしては、放送教育開発センター制作のもの、Hi-OVISの取材のもの、ゲストである茂木栄国学院大学研究員撮影のものを使用した。

17. 「極める ― 学問の方法と人生 ―」（島田）

ゲストに田丸徳善東大教授を迎え、宗教学者岸本英夫の人生と学問の軌跡を追うことによって、その問題に迫った。番組では岸本英夫の著作からの朗読を多用した。

18. 「癒す ― 医療と宗教のあいだ ―」（島田）

医療の問題は、現代のわが国における大きな社会問題として注目を集めている。ここでは、「癒す（いやす）」ことの意味を、医療と宗教の接点から考え直して見た。ゲストには、医師であり現在医療人類学を志している武井秀夫氏を迎え、付近の石切神社での信仰治療の模様などを紹介した。

19. 「救う ― 宗教教団と教祖 ―」（島田）

宗教教団は何らかの核を中心にして形成された人為的な集団である。ここでは、荒木美智雄筑波大学助教授をゲストに迎え、特に新興宗教の教祖の誕生と教団の発生を問題にした。また、金光教団からは教祖の伝記映画を借り受け、それを使用した。

20. 「求める ― 日本論の新しい出発 ―」（座談会：全専任講師）

以上の講座全体を振り返り、双方向システムの教育への活用の問題と、講座の評価について、モニターを混じえながら懇談した。

(5) テキスト

テキストについては、各回原稿用紙10枚程度を割当て、オフセット印刷によって制作した。テキストは『新しい日本学の試み——日本的なものを求めて——』と題し、事前にモニター、ならびに一般の受講生に配布した。

(6) ネットされたCATV局

1. 一関有線テレビ（岩手県一関市）

受講生 21名（申込み分）

放送開始 60. 10. 10

放送時間 木曜日19時から20時

2. 上田ケーブルビジョン（長野県上田市）

受講生 50名

放送開始 60. 10. 4

放送時間 金曜日9時から24時

3. CATV富士五湖（山梨県富士吉田市）

受講生 33名

放送開始 60. 10. 3

放送時間 木曜日21時から22時（再放送・金曜日16時から）

4. 下市町情報センター（奈良県下市町）

受講生 47名

放送開始 60. 10. 9

放送時間 金曜日に3回で、一月2回の放送

5. 大飯町CATV（福井県大飯町）

受講生 50名

放送開始 60. 10. 2

放送時間 水曜日12, 18, 21時から

6. 唐津ぴーぷる放送（佐賀県唐津市）

受講生 約200名

放送開始 60. 10. 7

放送時間 月～金曜日 15, 16, 19 半, 20 半から

7. ケーブルビジョン岸和田（大阪府岸和田市）

受講生 22名

放送開始 60. 10. 6

放送時間 月曜日 12. 14. 16 時から

〔4〕 今後の課題

すでに双方向を利用しての講義は、視聴者の側に参加意識を生み、また講師に対する親近感を抱かせる点では定評がある。また、質問のしやすさについても高い評価を受けている。いわば、テレビが講師と受講生を結び付ける媒介として機能し、その障害物とはなっていないのである。今回も、そういった点は問題がなかった。ただし H i - O V I S のシステムを拡大することが難しい点は問題になる。実際、H i - O V I S は 7 年に及ぶ実験をこの春に終了した。また、規模が拡大し、受講生の数が大幅に増加した場合の対応は容易ではないむしろコンピューターを利用しての双方向システムが開発されるべきではないだろうか。

ただ、今回の試みの意義は、放送を既成の番組を使わずに自主制作したことである。とかくこういった試みには著作権の処理が困難な問題をつきつける。それを回避するために様々な試みで対応したわけであるが、それなりに成功したものと思われる。これには H i - O V I S のスタッフの援助が大いに役立ったわけであるが、専門の放送局の力を借りないでも、それなりのレベルの教育を与えることができる。これは、今回の成果として評価できよう。もちろん、十分な映像表現という域にまでは達していないが、放送教育開発センターの研究スタジオの利用によって、今まで以上に進んだ映像作りが可能になっている。次の機会にはその成果を問いたいと思う。